

「嵐が丘」「ジェーン・エア」「アグネス・グレイ」
世界文学史に不朽の名を残すブロンテ三姉妹。
19世紀の英国ヨークシャー、風吹きすさぶヒースの丘を舞台に、
「海辺のホテルにて」の鬼才アンドレ・テシネが描く
短くも力強く生きた女達の魂の叫び。

書かれなかった真実がここにある。



マリー・フランス・ピージェ ● イザベル・ユペール ● イザベル・アジャニー

アンドレ・テシネ監督作品

ブロンテ姉妹

●バドリック・マギー ●バスカル・グレゴリー ●ジャン・ソレル
●脚本 アンドレ・テシネ/バスカル・ボニツェール ●共同脚本 ジャン・グリュオー
●撮影 ブリュノ・ニュイッテン ●美術 ジャン・ピエール・コユエスヴェルコ ●音楽 フィリップ・サルド
●製作 イヴ・ガセール/イヴ・ベイロ/アラン・サルド
●カラー作品 ●フランス映画 ●P.C.J配給



ブロンテ姉妹

THE BRONTË SISTERS

〈キャスト〉

エミリー・オザベル・アジャーニ
シャーロット・マリール・フランス・ピジェ
アン・オザベル・ユベール
父・バトリック・マギー
ブランヴェル・オ・バスカル・グレゴリー
ロビンソン夫人・エレヌ・シュール・ジュール
レイランド・ジャン・ソレル

〈スタッフ〉

監督 アンドレ・テシネ
脚本 アンドレ・テシネ
バスカル・ポニヴェル
撮影 ブリュノ・ニユイテン
製作 イヴ・ガセール
イヴ・ペイロ
アラン・サルド



〈解説〉

19世紀中頃、イギリスの片田舎の牧師館で三人の若い姉妹達が各々書きためていた紙の束を持ち寄り、居間の暖炉の前で互いに読んで聞かせたり、感想を交換し合ったりしながら過ごしていた。

このささやかな会合から、後にイギリス文壇を揺るがす事となる名作『嵐が丘』、『ジェーン・エア』が生まれようとは誰が想像しえたであろう。イギリス文学史を語る上で忘れる事はできないブロンテ三姉妹―シャーロット、エミリー、アン。文学上での輝かしい業績とは裏腹に、彼女達の私生活については以外に知られていない。牧師の家に生まれつき、その人生の殆どを父の教区ハウースの風吹きすさぶ荒野で過ごし、その特異な風土のせいも、あるいは貧苦のためか、次々と病に倒れ、人知れずひっそりと死んでいった……。彼女達の人生には、その作品群に見られる壮大なドラマもイマジネーションをかき立てられるようなエピソードも何一つない。それどころかそのあまりにも閉鎖的で息詰まる環境の中で、あれだけ生命力に満ち溢れる作品を生み出した原動力は何だったのか。死を目前にしながらしも衰える事なかった創造にかける執着は一体どこから来たのだろうか。それは今もって大いなる謎である。

フランスの鬼才アンドレ・テシネの手になる『ブロンテ姉妹』はしかしこの疑問を解き明かす手引書的な映画では決してない。近年公開された『海辺のホテルにて』同様ただ事実を断片的に観客に呈示してみせるだけであり、そこには何の粉飾も誇張もない。

ブロンテ姉妹は果たして稀有の天才だったのだろうか。世に認められないまま死んでいったエミリーとアンは本当に不幸だったといえるだろうか。彼女達にならって暖炉の前でこの謎について長い夜を語り明かすのも一興かもしれない。

出演は、エミリーに彼女をおいて他にないと思われるほどの適役イザベル・アジャーニ。今は、『サブリナ』、『インシテール』等で成熟した女の色気を見せてくれている彼女だが、この『ブロンテ』でのまだ初々しさを残しつつも、近寄りかたいはほど深とした美貌もなかなか捨てがたい。

フランスでも二人のイザベルと言えども、もちろんこのイザベル・ユベール。末娘アンを演じている彼女は、日本ではマイケル・チミム監督の大作『天国の門』で知られる程度だが、本国フランスではゴダールの『パッション』を始め数多くの出演作を持つ売れっ子だ。

一番上のシャーロットには、これまたベテランの域に入ってきたマリール・フランス・ピジェ。『真夜中の向う側』、『ココ・シヤネル』等の、気性の激しい女を本領とする彼女だが、『ブロンテ』では一転して忍ぶ忍に苦む大人の女をしつとりと情感をこめて演じており注目し得る。父バトリックには、イギリスの性格俳優、バトリック・マギー。『時計じかけのオレンジ』、『妻のランナー』等イギリス映画には欠かせない存在だが、ここでも推し手な演技ながら映画に格調と気品を与えた功績は大きい。

製作は『田舎の目撃目』のフラン・サルド。『海辺のホテルにて』でもテシネとコンビを組んでいる。撮影は『海辺のホテルにて』、『インディア・インディア』の名カメラマン、ブリュノ・ニユイテン。音楽に例えるならば作品の生旋律ともいえるハウースの荒野の表情を見事にとらえている。ロッシニの『コタンクリア』からオペラが効果的に使われており、静かだが情熱的に生きた彼女達の人生が荘厳とうたいあげられている。

〈物語〉

ハウースの丘にある牧師館にブロンテ一家は暮らしていた。牧師である父(バトリック・マギー)とその子供達―シャーロット(マリール・フランス・ピジェ)を筆頭に、ブランヴェル(バスカル・グレゴリー)、エミリー(イザベル・アジャーニ)、アン(イザベル・ユベール)、そして伯母のエリザベスである。

内向的なエミリーが好んで空想に耽った場所が荒野であった。アンと共に創りあげた『ゴンドール』王国物語やあらゆる詩作のイメージを呼び起こしたのもこの荒野である。

兄のブランヴェルには絵の才能があった。家族の願望を一身に集めていた彼だったが、アンと共に家庭教師に雇われた先での夫人とのスキヤンダルを境に身を持ちくずしてゆく。

一方、シャーロットは留学中のプリユッセルで、エジェ教授に思いを寄せていたが、受け入れられず絶望して故郷に戻る。

ある日、シャーロットはエミリーが書いた詩を見つけ、自分とアンの作品も併せて出版する事を思いつく。

女性の権利が認められない時代だったため名で出版された本は評判を呼び、三人の正体について同一人物か男女の共作かと世間でいろいろ取沙汰されるようになった。

アンとシャーロットはこの混乱をおさめるため出版社に赴き、真実を話さずだった。

この頃から家族の身辺には暗雲がちこめるようになった。まずブランヴェルが死に、病氣だったが治療するのを頑強に拒んでいたエミリーが倒れ、アンも後を追うように死んでいった。

年月が過ぎ、今や流行作家となったシャーロットは夫と出版者に伴われ、オペラハウスに観劇に出かける。幸福に包まれてみえる彼女だが愛する者を次々と失っていった淋しさが、顔面をよぎるのだった。

上映時間15分／フランス映画／カラー作品

上映時間(連日)

10:40 12:50 3:00 5:10 7:20

2月6日(土)待望のロードショー

特別御鑑賞券(1,200円)絶賛発売中!

当日 一般1,500円 学生1,300円 の処

東口伊勢丹新館隣

テアトル新宿

(352) 1846